

国境を超えた子どもたちが創る多文化社会

—コリア国際学園における実践から—

金 正泰ⁱ

大阪府茨木市にあるコリア国際学園は、在日コリアン社会の要求から生まれた国際学校である。2008年の設立から13年を経た現在、在日コリアン、日本人、韓国人、中国人、また、ミックスルーツを持つ生徒など、多様な文化的背景を持った生徒たちが一緒に学んでいる。2011年の留学生受け入れを契機に、日本語を母語とする生徒と留学生間の文化的葛藤など、多文化社会に向けた諸問題が表面化することになる。そのような問題に取り組みながら、多文化が共存する学校が実現するまでには、留学生など国境を超えてコリア国際学園に通うようになった生徒たちの影響がある。日本国内の研究では、留学生が支援の対象として位置づけられたり、外国人児童生徒の不就学問題、ミックスルーツの子どもたちのアイデンティティの問題として取り扱われたりするケースが多い。しかし、コリア国際学園のケースでは、学校が多文化社会化してく過程で、国境を超えた生徒たちが重要なアクターとなる。本稿では、コリア国際学園が多文化（多言語・多民族¹⁾・多国籍）学校に変容する過程を、国境を超えた子どもたちの成長に着目して、当事者の立場から分析を試みた。

キーワード：多文化共生、異文化交流、外国人学校、留学生、アイデンティティ、言語教育、
学校の変容過程、異文化間葛藤

はじめに

大阪府茨木市にあるコリア国際学園中等部高等部（以下、コリア国際学園）は2008年に設立されたコリア系のインターナショナルスクールである。26人の在日コリアン²⁾と日本人の生徒で出発したコリア国際学園は、2011年から留学生の受け入れを始め、現在は在日コリアン、日本人、韓国人、中国人など多様な文化的背景を持つ生徒たちが在籍する多文化学校へと変容した。本稿は、留学生の受け入れから10年間、多文化共生を目指すコリア国際学園の教育がどのように行われてきたのか、そして、いかなる意

義を持つのかを明らかにすることを目的とする。

世界でグローバル化が進行する中、日本において多文化共生という言葉が使われるようになって久しいが、日本の人口に対する外国人の割合はわずか2.3%に過ぎないため、現実問題として実感するのは外国人集住地域など、まだまだ社会の一部に限られるのかも知れない。多文化共生教育は、まず、学校でのマイノリティとして外国人児童生徒に対する教育支援、あるいは、マジョリティである日本人児童生徒に対する国際理解・異文化理解教育として捉えられる。しかしながら、多文化共生に関連して、世代を超えて日本に定住する在日コリアンなど、いわゆるオールドカマーに対する研究や朝鮮学校³⁾など、民族教育に関する研究も盛んに行われている。オー

i コリア国際学園中等部高等部学校長

ルドカマーに対する研究テーマは就職や居住、結婚などにおける差別問題や次世代のアイデンティティの問題、また、朝鮮学校に対する差別的な政策など多岐にわたる。特に近年では朝鮮学校を高校無償化から除外した問題⁴⁾や、補助金の不支給など、制度的な差別に関する研究も盛んに行われている。したがって、多文化共生教育は、外国人児童生徒に対する日本語支援や日本人生徒に向けた国際理解・異文化理解教育ばかりでなく、人権・差別教育、外国人学校の差別や支援の問題などを含めて様々な視点から取り組まれていく必要がある。

コリア国際学園は日本国内に存在する一条校⁵⁾(中学校や高等学校)、朝鮮学校や韓国学校などの外国人学校とも一線を画す存在である。コリア国際学園はオールドカマーである在日コリアン2世が中心となり設立した学校であり、「主に在日コリアンを国際人として育成すること」を目的として設立されたが、国家や民族にとらわれないという意味で、これまでの外国人学校や民族学校と一線を画していると言える。コリア国際学園では、当初から「越境人の育成⁶⁾」を建学の精神に掲げ、国家や民族を超えた新しい枠組みの中で活躍する人材の育成を目指している。こうした理念に共鳴した多様な文化的背景を持つ生徒たちが学んでおり、前述した多文化共生に関するほとんどの問題をまるごと抱えていると言っても過言ではない。また、コリア国際学園は日本国内に存在する欧米系のインターナショナルスクールとも異なる側面を持つ。日本においてはインターナショナルスクールに関する法令上の規定はなく、文部科学省によると「一般的には主に英語により授業が行われ、外国人児童生徒を対象とする教育施設」と捉えられている。コリア国際学園は言語教育を教育の柱の一つとしているが、学校内で明確な公用語を規定しておらず、言語以外の授業は日本語で行われている場合が多い。校内では日本語やコリア語⁷⁾、英語や中国語が自由に使われており、学校便覧や毎月の日程表などは日本語、コリア語、中国語で発行される。

さて、コリア国際学園に関する研究を振り返っておくと、これまでにいくつか資料が出版されている(脇坂 2015, 金南 2016, 金南 2018, 趙世珍 2018)。脇坂は、コリア国際学園の設立過程と設立初期の学校運営について総合的に検証し、コリア国際学園が目指した越境人育成のための教育がどのように行われたのかを明らかにした。著書では在日コリアンの教育問題からグローバル教育が目指されるようになった経緯、教育方針の苦悩や財政面での学校運営の厳しさが、当事者(理事、生徒、保護者、教職員など)への取材を通じて詳細に語られた。金南は地域や公立小学校との交流を通じたコリア国際学園の変容過程、またコリア国際学園に通う日本人に着目して、外国人学校のニーズや役割について考察した。これはコリア国際学園の外国人学校としての側面に着目した研究だと言える。2008年の設立当初、コリア国際学園は地域住民の反対運動により、予定通りに校舎建設が進まなかった。その後の学校運営の過程で、外国人学校と地域、公立学校との交流が双方に与えた影響を、コンタクト・ゾーンという概念を用いて明らかにした。一方、趙世珍はコリア国際学園に通うコリアにルーツを持つ生徒たちの名前をめぐる経験から、コリア国際学園の教育が生徒のアイデンティティ形成にどのような影響を与えたのかを考察した。

筆者は2011年から現在までコリア国際学園に勤務しており、2019年からは校長を務めている。その間、コリア国際学園の生徒の構成は多様化し、日本語を母語とする生徒は依然として多数を占めているものの、多言語・多民族・多国籍が共存する学校へと変容している。「越境人の育成」を目指したコリア国際学園の挑戦は、2011年の留学生受け入れから大きく変化した。こうしたコリア国際学園の短い期間の変化は、日本社会がこれから直面する多文化社会化の縮図のようであると言える。本稿では、在日コリアン、日本人とともに、コリア国際学園に通う重要な主人公である留学生など、国境を越えた子どもたちに注目し、多様な文化的背景を持つ生徒たちが育つ

ていく姿に着目する。

1章と2章では、コリア国際学園の概要と歴史について振り返り、留学生を受け入れて多文化社会化していくコリア国際学園の変容について、主として筆者がこれまでに直接関わって来た経験と資料に基づき、整理する。3章以後では、母語・国籍・民族・居住地が多様で、様々なルートから国境を越えてコリア国際学園に通うようになった4人の生徒たちへのインタビュー調査の結果を分析したうえで、コリア国際学園が追求する「越境人の育成」の成果と意義について考察する。

1. コリア国際学園の概要

1910年の日本による朝鮮半島の強制併合により、多数の朝鮮人が日本に居住するようになった。その数は1945年の時点で200万人⁸⁾に上る。強制連行された朝鮮人や日本での差別的な生活に苦しんだ朝鮮人は故郷への帰国を望んだが、日本で生まれ育った2世は朝鮮語を理解することができず、日本全国で国語講習所⁹⁾が作られ、朝鮮語教育が始まった。これが日本における在日朝鮮人の民族教育の始まりである。

在日コリアンの民族教育はその後、朝鮮学校と韓国学校に分化し、それぞれ体系化されていく。すなわち、1948年の大韓民国、朝鮮民主主義人民共和国の建国と在日朝鮮人団体の分裂により、在日コリアンの民族教育も分裂し、外国人学校（各種学校）として体系化された朝鮮学校と日本や韓国の認可と支援を受ける韓国学校として発展していく。朝鮮学校は就学前教育から高等教育まで備えた体系的な学校として、外国人学校（各種学校）の中でも存在感を示しており、韓国学校は日本の一条校、あるいは韓国の認可学校として、その枠組みの中で民族教育を実施している。

コリア国際学園は、上記2つの民族学校を含む既存の学校教育が推進する国民形成のための教育（国民教育）を否定し、多様化する在日コリアン新世代

の要求に応えるために、在日コリアン2世が中心となって2008年に設立した国際学校である。1910年の日本による朝鮮の強制併合から始まった在日コリアンの歴史はすでに100年を越えており、4世、5世が登場するようになっていく。設立発起人たちが対象とした在日コリアン4世、5世はコリアにルーツを持ち、日本で生まれ育った世代である。日本国籍を取得した人たちが増える一方で、韓国籍や朝鮮籍¹⁰⁾を維持している人たちもいる。また、日本で生まれ育ち、日本語を母語として、日本文化の中で生活しつつ、食文化や祭祀などでは祖先の文化を受け継いでいる。国籍、民族、生活文化が多様化し、また、世界のグローバル化によってトランスナショナルな生き方を目指す人たちも増えてきた。日本の一条校や朝鮮学校、韓国学校で実施される国民教育は彼らの存在や目指す生き方に合致しない。コリア国際学園の設立はグローバル化する世界と生き方が多様化する日本社会の要求の中でもたらされたものである。

コリア国際学園は各種学校として認可されており、中学校、高等学校に相当する年齢の生徒たちが通っているコリア系のインターナショナルスクールである。国家、民族、思想、文化などあらゆる境界を越えて活躍できる越境人の育成を建学の精神に掲げ、日本の中学校、高等学校の教育内容をベースにしつつ言語教育や国際理解教育、人権教育を取り入れた独自のカリキュラムで教育を実施している。コリア語、英語、日本語の3言語の高い運用能力と問題解決能力、コミュニケーション能力の育成を目指しており、授業だけでなく豊富な海外研修や体験学習を実施している。

生徒の構成は2021年時点で国籍を基準にすると日本人、韓国人（留学生）、中国人、アメリカ人がおり、また、二重国籍の生徒もいる。しかし、国籍だけでなくコリアにルーツを持つ在日コリアンや、民族や居住地などが複合的な「多様な文化的背景を持っている生徒」も多く在籍している。2021年度の生徒数は69人で、構成は在日コリアン40.6%、日本人33.3%、韓国人21.7%、中国人4.3%となっている（2021年5

月1日時点)。

コリア国際学園の授業は日本の中学校、高等学校の授業をベースにコリア語、英語の授業を充実させており、また、コリア史、コリア地理、在日コリアン史などのコリア系の科目や多文化共生論、時事討論、Liberal Artsなど教科横断的な科目が特徴的である。週当たりの授業数は中等部が33コマ、高等部が32コマで、そのうちのおよそ半分が言語の授業になる。コリア語と英語の授業はすべてネイティブスピーカーの教員が授業を担当しており、レベル別に授業が実施されている。上級クラスでは小説や新聞、雑誌の記事などを利用した社会問題を取り扱うことも多く、イマージョン教育¹¹⁾に近い授業だと言える。コリア語教育は特にレベルが高く、入学して3年程度で韓国語能力試験6級を取得する生徒もいる。これは、コリア語の授業だけでなく、留学生や教員との日常的な生活会話などを通じた言語能力習得の効果であると考えられる。

中等部2年時には韓国の梁山にある協定校に2週間の韓国研修に行く。韓国研修では韓国の中学校の授業に参加しつつ、生徒の家でのホームステイを体験する。高等部1年時には2週間のカナダ研修があり、韓国研修同様、現地学校での授業体験や文化体験、ホームステイを実施する。海外研修時の友だちとは研修後も関係が続き、生徒たちの言語能力の向上や国際体験の広がりにつながっている。他にも夏休み、冬休み、春休みに実施される海外でのボランティアやスタディツアー、国際カンファレンスなど、生徒たちが海外体験をする機会が豊富に用意されている。日常的には生徒会活動やユネスコ委員会活動、ボランティア活動などが活発である。このような活動は生徒たちの動機形成に寄与しており、生徒たちは海外への進学や国際的な舞台上で活躍することを考えるようになる。

コリア国際学園を卒業した生徒たちの進路は日本、韓国、英語圏の大学など世界に広がっている。2020年までの卒業生は138人で、日本の大学(専門学校含む)に進学した生徒が98人(71.0%)、韓国の大学に

進学した生徒が21人(15.2%)、英語圏の大学に進学した生徒が10人(7.2%)である(表1を参照)。韓国の大学進学希望者は2021年度卒業生から増加傾向にある。次章では、引き続き、コリア国際学園の今までを学校側当事者の立場から振り返り、コリア国際学園の多文化共生教育に向けた実践を詳しく説明していく。

表1 コリア国際学園卒業生の進路状況

卒業年度	進学先国				計
	日本	韓国	英語圏	その他	
2010年度卒業生	5	3	1	0	9
2011年度卒業生	1	2	0	0	3
2012年度卒業生	4	0	0	1	5
2013年度卒業生	8	5	3	0	16
2014年度卒業生	6	5	0	0	11
2015年度卒業生	10	2	0	1	13
2016年度卒業生	8	0	1	1	10
2017年度卒業生	10	2	3	0	15
2018年度卒業生	16	0	1	3	20
2019年度卒業生	20	0	1	1	22
2020年度卒業生	10	2	0	2	14
合計(人)	98	21	10	9	138
合計(%)	71	15.2	7.2	6.5	100

2. コリア国際学園が目指してきた多文化共生

2.1. 韓国人留学生の受け入れと葛藤

2008年4月、コリア国際学園は特定非営利活動法人コリア国際教育振興会を設立主体として開校した。設立当初、将来の理想的な生徒数の構成について「在日コリアン、日本人、韓国人(留学生)が3分の1ずつ¹²⁾」を目指したが、初年度の入学者26人の生徒構成は、在日コリアン25人、日本人1人であった。在日コリアンと言っても生徒たちのバックグラウンドは多様で、コリア語が母語の生徒も1人いた。校内では日本語とコリア語が主要なコミュニケーション言語として使われ、第2言語習得のために学校内で

は韓国語の使用が推奨された。しかし、1人を除いては日本で生まれ育った日本語を母語とする生徒たちだったために、学校内で異なるバックグラウンドを持つ生徒同士の文化的葛藤が顕在化することはなかった。生徒の構成からも日本語を母語とする生徒たちに韓国語を習得させることに注力し、学校内の掲示物や会話も韓国語が推奨された。民族教育としての色彩が濃く残っている時期だと言える。

2011年度からは学校法人韓国国際学園が設置する学校となり、同年から韓国留学生の受け入れが始まる。表2は2008年度から2021年度までの生徒数の推移と文化的背景である。この表で在日コリアンとは、朝鮮半島にルーツがあり、日本で生まれた、または、ほとんどの期間を日本で過ごした生徒で、国籍は韓国・朝鮮・日本あるいはそれらの二重国籍の生徒である¹³⁾。保護者のどちらかが日本人あるいは韓国人の場合も含まれる。日本人とは、両親・本人とも日本で生まれ育ち、国籍も日本の生徒である。韓国人とは、本人が韓国で生まれ育ち、国籍も韓国の生徒である。両親のどちらかが日本人の場合も含まれる。中国人とは、本人が中国で生まれ育ち、国籍も中国の生徒である。民族的には漢族、朝鮮族、チベット族の生徒たちが含まれる。生徒の母語は、在日コリアンと日本人は日本語、韓国人は韓国語、中国人は中国語である。

韓国国際学園が初めて文化的葛藤を実感するのは2011年度に韓国留学生を受け入れてからである。授業や学校生活で異文化理解、多文化共生について学んでいても、生徒たちが実生活において文化的葛藤を客観的に観察し、それを乗り越えていこうとすることは簡単なことではない。

学校法人の認可取得に合わせて2011年度から韓国の留学生を本格的に募集することになったが、この年、中等部・高等部合わせて7人の留学生が入学し、2010年度に入学した1人と合わせて8人が韓国語を母語とする生徒であった。留学生たちは基本的には日本語（国語）以外の授業は日本語を母語とする生徒と同じ授業を受けた。放課後に補習授業が行わ

表2 コリア国際学園生徒数の推移と文化的背景

		全校生	在日	日本人	韓国人	中国人
2008年度	人 %	26 100	25 96.2	1 3.8	0 0.0	0 0.0
2009年度	人 %	30 100	29 96.7	1 3.3	0 0.0	0 0.0
2010年度	人 %	40 100	38 95.0	1 2.5	1 2.5	0 0.0
2011年度	人 %	47 100	36 76.6	3 6.4	8 17.0	0 0.0
2012年度	人 %	67 100	47 70.2	11 16.4	9 13.4	0 0.0
2013年度	人 %	88 100	70 79.5	15 17.0	3 3.5	0 0.0
2014年度	人 %	87 100	65 74.7	15 17.2	7 8.1	0 0.0
2015年度	人 %	96 100	71 74.0	15 15.6	9 9.4	1 1.0
2016年度	人 %	92 100	61 66.3	15 16.3	14 15.2	2 2.2
2017年度	人 %	115 100	64 55.6	13 11.3	31 27.0	7 6.1
2018年度	人 %	85 100	48 56.5	11 12.9	19 22.4	7 8.2
2019年度	人 %	66 100	41 62.1	8 12.1	12 18.2	5 7.6
2020年度	人 %	58 100	29 50.0	10 17.2	16 27.6	3 5.2
2021年度	人 %	69 100	28 40.6	23 33.3	15 21.7	3 4.4

（注記：2008年度から2010年度までは各年度に在籍した全生徒を対象とした。2011年度以降は、大阪府に在籍生徒数として報告した5月1日時点の生徒数とした。）

れ、日本語で行われる授業で理解できなかった部分を復習したり、翌日の授業の教科書の単語を韓国語に訳したりしながら予習をした。留学生たちは放課後もクラブ活動をしたり、遊んだりする時間を惜しんで、学校での授業についていくために努力した。駐在員として来日している両親と暮らす2人以外は寄宿舎で生活した。学校で日本語の勉強に明け暮れた留学生たちは、寄宿舎に戻ると留学生で集まり韓国語で話した。解放されたように興奮し、自然と

声が大きくなった。

寄宿舎は2人部屋で、言語習得の意味から留学生と日本語を母語とする生徒を組み合わせるようにしたが、在日コリアンと日本人は日本語を母語とする一つのグループを形成するようになり、留学生たちとの文化的葛藤が表面化することになる。「韓国人はうるさい」、「人のものを勝手に使う」、「掃除をしない」など生活習慣の問題から対立し、日本語を母語とするグループから「在校生と留学生」という表現が使われるようになった。当然、留学生たちも「在校生」であるが、留学生を「後から入ってきた異質な人たち」と位置づけるような差別的な表現である。また、日常の学校生活で言語コミュニケーションがうまくとれないことも多く、その度に留学生グループからは「コリア国際学園なのに日本人(在日含む)はコリア語を使わない」、日本語を母語とするグループからは「コリア語が使われると何を言っているか分からない」など双方を非難する声が聞かれた。授業、学校生活のストレスから飲酒・喫煙・学校内外での暴力などの逸脱行動が留学生たちの中で頻発するようにもなった。「留学生は韓国に帰れ!」などの差別発言が表出したこともあった。留学生の自主退学、指導処分過程での退学などが増え、2011年度、2012年度に入学した留学生のうち高等部を卒業したのはわずか2人という状況に陥った(2013年度に卒業)。

このような事態に直面して、コリア国際学園では留学生の教育を大きく見直すことになる。受け入れ直後は基本的には日本語を母語とする生徒と同じ授業を受けることを前提として、言語問題で生じる学習の遅れは補習で解決しようとしていたが、数年間の試行錯誤を繰り返し、現在は授業内で日本語を学習し、学校や寄宿舎での生活を通じて交流を深めるようにしている。留学1年目は日本語(国語)、コリア語の他、社会、科学など日本語が多く使われる科目を含め週10~12コマ程度を留学生日本語の授業に振り替えた。留学2年目は日本語(国語)の他、社会、科学など日本語が多く使われる科目を含め週5

~7コマ程度を留学生日本語の授業に振り替えた。ただし、留学生個人の日本語のレベルによって、留学生日本語に振り替える科目や期間は柔軟に対応するようにした。また、留学生がいるクラスにコリア語が可能な教員をできるだけ配置し、両言語で授業を実施するなどの対策も立てた¹⁴⁾。また、韓国での語学研修や修学旅行、ボランティア活動など交流機会も増やした。中等部2年の韓国研修では協力校で2週間の学校体験とホームステイを体験する。他にも夏休みのオリニ希望学校¹⁵⁾、冬休みのスタディツアー、春休み韓国研修などを企画し、韓国や韓国人と触れ合う機会を積極的に増やした。その結果、日本語を母語とする生徒のコリア語能力が向上、韓国文化への理解も深まり、韓国人留学生との言語的・文化的葛藤をある程度解消することができた。現在は、留学生との交流が日本語を母語とする生徒のコリア語能力を飛躍的に向上させてくれている。また、留学生の日本語能力も来日1年で日本語能力試験1級合格者を出すほどに、双方が好影響を与えることができるようになってきている。日本語を母語とするグループと韓国人留学生との間の言語的・文化的葛藤を解消するのにおおむね5年の時間がかかったが、言語運用能力の向上や異なる生活習慣への接触機会を増やす教育プログラムの充実が言語的・文化的葛藤の解消に効果的であるという貴重な経験を得ることができた。

2.2. 2言語文化から、多言語文化へ

2014年度末に、初めて中国人留学生が転入した。次章で紹介するH・Mさんである。上海に住む朝鮮族の生徒で日本留学に合わせて日本語の家庭教師をつけて事前学習をしてきた。朝鮮族だが朝鮮語はできず、両親は日本語とコリア語を学べる学校であるという理由でコリア国際学園への留学を決めた。少しは日本語を学んできたこともあり、生活上大きな支障はなかったが、はっきりとした物言いのためクラスの生徒たちになじむのには時間がかかった。なんでも自分で解決しようとする生徒で、これまでの環

境と違う留学生活にも物おじすることなくチャレンジした。来日から数か月しか経っていないときに筆者が彼女を歯科医院に連れて行ったことがあるが、彼女は自分で症状を説明して治療を受け、会計も済ませてきて、驚いたことがある。1年後にはクラスメイトたちになじんでいった。

翌年に彼女の友人が入学し、その翌年にまた一人と入学者が増え、2018年度には中国からの留学生は全校生の8%を超えるようになった。また、2018年度にはアメリカで生まれ育った在日コリアンの姉妹2人が入学し、コリア国際学園は多言語、多文化が共存する学校へと変貌していった。

2016年以降に入学してきた中国人留学生は日本語がほとんどできない状態で入学し、授業や学校生活になじむのにかなりの時間がかかった。寄宿舎では中国語とコリア語を話すことができる朝鮮族の教員が舎監を務めたが、学校には中国語を理解する教員はいなかった。中国人留学生が3人を超えるころから、「中国人」というグループが自他共に意識されはじめた。中国人留学生が1人の時は、その生徒がコリア国際学園のカリキュラムをそのまま履修することが当然とされたが、中国語話者グループとして意識され始めたころから中国人留学生たちの母語教育が議論されるようになった。中国人留学生は週に2回、放課後に集まり、中国語の学習をするようになり、中国文化研究会¹⁶⁾を作るなどして中国文化を学び、学校内外に知らせるための活動もするようになった。一方、中国語を理解する生徒や教員がほとんどいないせいで教員とのトラブルも相次いだ。宿題やレポートの不正行為が疑われたり、必死で話す日本語が教員への反抗と取られたりすることもあった。また、ストレスから寄宿舎の部屋に閉じこもるなど体調を崩したり、メンタルクリニックに通院したりする生徒もいた。

当初、コリア国際学園の入学政策によって意図して増えたわけではなかったが、コリア国際学園としては中国人留学生たちのための教育環境、生活環境、進路指導などの体制をとる必要があり、中国人の専

任教員と非常勤講師に来てもらうことになった。また、寄宿舎の調理師も中国語が可能な人に来てもらい、ある程度、生徒たちのケアができる体制を作った。また、中国人留学生の中国語授業だけでなく、中等部2、3年で中国語の授業も実施するようにして、生徒たちの中国や中国文化への理解も深めるよう取り組んだ。それと同時に、中国からの留学生を本格的に募集することを決め、募集体制の整備を進めた。2020年度からの新型コロナウイルスの感染拡大によって、留学生の募集は順調ではないが、欧米など遠方への留学を躊躇し日本への留学を考える中国人が増え、問い合わせは増加中である。現在の中国人留学生3人のうちの2人は学業、学校生活共に順調で、2021年度の入学生1人は未だ入国できず中国からオンライン授業を受けている。

2.3. 多文化社会への取り組み

これまで、韓国人留学生を受け入れた2011年度以降、中国人留学生を受け入れた2015年度以降の生徒たちの様子と学校の取り組みについて紹介したが、学校の多文化社会化に伴い、生徒間の問題以外にも様々な問題が表面化した。ここでいくつかそうした問題を具体的に紹介する。

一つ目は、コリア国際学園の在り方に関する問題である。「コリア」と「国際」というのは一見すると相反する概念のようだが、コリア国際学園の設立経緯から考えると、コリア語やコリアの文化を通じてアジアや世界へとつながっていくイメージが込められていると考えることができる。しかし、生徒数が増えるように集まらず、また、学園関係者（理事、教職員等）の思惑から学校の在り方が大きく揺れることもあった。コリア国際学園はもともと国民教育を否定し、国家や民族という枠組みを超えた新たな世界を展望し、そうした世界で活躍する人材の育成を目指した。しかし、経営上の必要から、国家からの支援を受けるために韓国の認可学校を目指したり、あるいは「アジア太平洋インターナショナルスクール」を目指したりと方向性が揺れたことがあった。こ

れら二つの方針は学校の教育方針や社会の要求から出発したものではなく、主に経営基盤の安定化や生徒募集拡大のための方針転換であった。そのため、根拠が不十分で、準備不足、方針の不安定さから頓挫することになった。その間に少なくない混乱があった。

二つ目は、日本的な教育文化への執着である。コリア国際学園の生徒と保護者、教職員は日本、韓国、中国、アメリカの文化が共存しており、教育に対する考え方や学校文化も大きく違う。学校の規則やルール、学び方、生徒指導など具体的な学校生活においては毎日が小さな文化衝突の連続である。このような衝突が「コリア国際学園は日本にあるのだから日本の常識に従うのは当然」、「コリア国際学園はイ

ンターナショナルスクールなので自由であるべき」など学校の在り方の問題に発展したり、生徒同士の小さな衝突も文化（民族や国家の）の問題にすり替えられていったりすることがしばしば見られた。そうしたなか、学校の教育理念を都合のいいように解釈して「こんなのはKIS（コリア国際学園の略称）らしくない」と相手を攻撃する姿がしばしば見られた。韓国人留学生を受け入れたときの「新参者」に対する攻撃性が、中国人留学生や英語を母語とする生徒の受け入れを機に再現され、異文化への反発が日本的な教育文化への執着を喚起し、「KISらしさ」という言葉で表現されたわけである。

2021年度の生徒の構成は在日コリアン40.6%、日本人33.3%、留学生26.1%（韓国21.7%、中国4.4%）で

▶ KISの価値観と教育実践の原則

多文化社会とはどのような社会なのか。多文化社会で大切なことはなにか。

多様な文化的背景と価値観を持つ人たちが集まったKISは、毎日が文化的葛藤と解決に向けた取り組みの連続でした。その中で私たちが感じたことは、「多文化共生はそんなに簡単ではない」ということです。KISの歴史の中で苦しみや、痛みをともなうこともありました。その成長の中で私たちが得たものが、個性の尊重を前提としたグローバル社会の在り方です。

それは、言葉だけのきれいごとではなく、「ルールとモラルと仕組みをつくること」でした。これが、誰一人として取り残すことのない多文化社会に向けたKISの取り組みです。

KISの価値観 人（社会と自然含む）・多様性・学びの尊重

KISの教育実践の原則 自由と責任

人が多様化し、時代が変わることで、新しい課題や、解決すべき問題が生まれます。その時に、判断基準とするものがKISの価値観「人・多様性・学びの尊重」です。そして、教育活動を実践する際の原則が「自由と責任」です。

自由の無いところで自由を尊重する心は生まれず、責任のないところで責任感はやちませぬ。

KISには

人を大切にできる自由はありますが、人を傷つける自由はありません。

人と違う自由はありますが、人と違うことを責める自由はありません。

一生懸命学ぶ自由はありますが、学ばない自由はありません。

これが価値観と原則の関係です。

▶ 2020年度に取り組んでいるもの

- ①共有するルールのハードルは下げて、具体的にすること。教務規定・学校生活のしおり・進路指導規定を改定し、指導処分規定を策定しました。学びに関する規定をしっかりと見直しました。服装や頭髮などのルールは無くしました。もちろん、制服を着る自由もあります。
- ②学校便覧、学校教育計画は日本語版、コリア語版、中国語版を作りました。みんなが共有すべきルールをしっかりと理解するためです。ルールにないことで人を責めることはできません。
- ③生徒・保護者・教職員・理事・教育専門家・地域住民で構成される教育評価諮問会議を設けました。年に2回、学校教育活動を振り返り、みんなが共有するルールを見直します。

ある。設立当初の「在日コリアン、日本人、韓国人が3分の1ずつ」という学園の目標数値に、中国人留学生を加えて近づいている。2016年度以降の学園の多文化社会化は「多文化共生教育とはなにか」という問いを真正面から突き付けたのである。2019年度以降、コリア国際学園はこの問いに対する一つの挑戦として、まず、学校の価値観と教育原則を明確化していこうという教育改革に取り組んでいる。資料1は、そうした苦闘の中から、言語化されたコリア国際学園のパンフレットの文である。

3. 国境を越えた子どもたちのケーススタディ

留学生たちが日本にあるコリア国際学園を選ぶには様々な理由がある。一番多いのは日本や日本語、日本文化が好きという生徒たちであるが、現在の韓国（中国）の教育に不満を持って留学を選択する生徒たちもいる。特に韓国では多感な中高生時代に、0時間目（早朝）から学校での夜間自習、その後の学習塾での勉強というぐあいに、受験勉強漬けの学校生活を送らせたくないとする生徒保護者たちもいる。一方、明確な理由を持たずに留学してくる生徒たちもいる。「留学することで将来が開けるかもしれない」、「何かを変えたい」など、漠然とした期待を込めての選択である。

前章まで見てきたように、コリア国際学園では2016年度以降、韓国人留学生の受け入れが一定の成果を上げ、ほとんどの生徒が希望する進路の実現を果たせるようになった。同じ時期に中国人留学生の受け入れが始まり、学校が多文化社会化していったが、そうした新たなコリア国際学園の在り方に一定の方向性を示すことができた。そうしたコリア国際学園の新たな展開が、生徒たちにはどのような影響を与えているのだろうか。そこで、留学生など国境を越えてコリア国際学園に通うようになった生徒たちに、これまでの学校生活と自身の変化についてインタビューを試みた。以下、3つのケースについて、

4人の聞き取りデータを分析しながら紹介していく。なお、この4名からは本稿の趣旨について説明をした上で聞き取りに対する同意を得てインタビューを実施した。

3.1. O・Yさんのケース：「留学生活は人生の選択肢を増やしてくれた」

インタビューは2021年4月27日に寄宿舎で行った。インタビューはコリア語で実施し、以下、筆者が日本語に翻訳している。

2017年度に中等部1年に入学したO・Yさんは韓国釜山の出身で現在は高等部2年生である。来日後4年が経過した現在は日本語も流暢で、国際バカロレアコース（日本語IB）で学んでいる。

コリア国際学園への留学は知人の紹介だという。「（コリア国際学園を）〇〇さん（同じ学年の留学生）が紹介してくれたんです。お母さんも韓国の教育方式をよく思っていませんでした。塾ばかり通っていてもソウル大学に入れるという保証もないし。留学したらいい経験になるだろうし、将来の選択肢が増えそうで。少なくとも日本語はできるようになるでしょうし。」

「学校のオープンスクールに来た時にとっても学校の雰囲気が良かったんです。私もあの中に入りたいて思いました。楽しそうでした。」

勝気な性格のO・Yさんは来日初期のころは日本語が分からずによく泣いていた。

「言語ができなくて勉強についていけなかったのが辛かったです。成績も悪かったんですね。」

「よく泣きました。成績のこともあったし、友だちとの関係もあったし。ホームシックにもなりましたね。（中略）中1の時に授業中に先生から『家に帰りたくない？』って聞かれたんですが、あんまりにも帰りたくてその場で泣いてしまいました。」

中学生からの早期留学を検討するときに、コリア語が通じる環境であるコリア国際学園は韓国人にとっては安心できる材料の一つになっている。また、多様な文化的背景を持つ生徒たちの中に身を置くこと

で、自分が「特別な存在」にならないという安心感も得られる。

「日本の学校は留学生を受け入れるシステムがありませんよね。ただ私がそこに合わせて勉強するしかない。KISは留学生のための授業もあるし。いろんな人もいますよね。韓国人もいるし、日本人もいるし、在日もいるから。(日本の)公立(学校)に行ったら私だけが韓国人で差別されそうで。」

「知らないことをたくさん知りました。在日コリアンの存在も知りませんでしたし、歴史も知りませんでした。(中略)中国人と仲良くなったこともありませんでした。(韓国では)中国人に対する視線が良くなかったんです。ここに来て自分にも偏見があったんだなと思いました。」

自分と違う存在と触れ合うことで、韓国での自らの中国人に対する差別意識への気づきがあった。

「日本に来る前から日本人は優しいって思っていました。実際に来てみて、やっぱり優しかった。」

「独島問題もありますね。…独島は韓国のものだと思います。昔から韓国のもんです。日本人は竹島のことを知らない人もいますけど、韓国人はみんな(独島が)どこにあるか知っていますよ。歌もありますし。(中略)私が日本を悪く言っているみたいですね。でも、知らないこともあるので、もう少し調べてから話したいです。」

韓国にいたころは、「独島は韓国の領土」であるという事に疑いを持ったことはなく、また、周りはすべて韓国人で、みんなが「独島は韓国の領土」と思っているため、根拠を持って話すこともなかった。しかし、日本人と共に過ごすことによって、「ちゃんと知らなければ」と考えられるようになった。

留学生活によって自分が変わった点、成長した点について聞いてみたところ、即座に「自信が持てるようになった」と話した。

「学級委員もしたかったし、友だちと円滑に話すこともできませんでした。学校で実施するボランティア活動などにも参加したかったのに、手をあげることができませんでした。(中略)日本語ができないか

ら私が行ったら迷惑なんじゃないかと思ってしまっただけ。」

「自信ができたと思います。もともとは消極的な性格だったんです。理解できないことも流すことが多かったんです。最近では『なぜ?』、『なんでそうなったの?』とか。授業中にもよく質問するようになりました。(中略)最近ではそれが大事だと思うようになったんです。原因は?理由は?歴史の授業でも(国際バカロレア¹⁷⁾コースの)TOK¹⁸⁾の授業でも。」

日本人や在日コリアン、中国人との触れ合いを通じて、自分の考えの根拠を意識するようになり、相手の考えを理解しようとするようになった。そして、それはお互いの考えを共有できる言語能力を有することで可能になる。このような、コリア国際学園での学びと生活の繰り返し、O・Yさんに自己肯定感を持たせたと言える。

「(中等部1年のころは)友だちともよくケンカしましたが、言葉が通じなくてもどかしかったです。差別のようなこともありました。祖国に帰れ。お前の祖国に帰れって。露骨な差別もありました。(中略)幼かったんで。腹が立ってカーっとなって。」

O・Yさんは、中等部1年のころの言語や文化の違いによる葛藤が、その後の対立につながることなく解消できたことについて、「友だち」の存在があったという。

「泣いたときは友だちが慰めてくれたんです。慰めて元気づけてくれて。KISのみんなは本当に良い人たちです。」

「韓国に帰れ!」という差別発言は2011年にもあった。しかし、O・Yさんのケースではそれが日本語を母語とする生徒と留学生の葛藤につながることはなかった。コリア国際学園の日本語を母語とする生徒のコリア語能力は、生活言語として十分なレベルにあり、O・Yさんが言語・文化の違いや差別によって苦しんだ経験は、多様な生徒たちのサポートによって乗り越えることができた。

O・Yさんは中等部3年時には生徒会の役員として活動した。2021年度は留学生初の生徒会長を目指

して、立候補し、現在は演説の準備に取り掛かっている。

3. 2. C・ZさんとH・Mさんのケース：「韓国ではぼくは中国人（漢族）って思われています」、 「中国人よりチャイニーズの方がしゃくりきます」

C・Zさんは2021年2月25日に対面でインタビューした後、4月25日にメールによる付加的なインタビューを実施した。2回ともインタビュー言語は日本語である。

H・Mさんはコリア国際学園初の中国人留学生である。H・Mさんの母親の日本語教師がC・Zさんの母親で、寄宿舎の舎監である。母親の勤務に同行する形でC・Zさんは来日した。2人とも中国朝鮮族で、上海で生まれ育った。

C・Zさんは小学校1年を終えて、延吉（中国吉林省延辺朝鮮族自治州の都市）に移り朝鮮族学校に通うようになったが、朝鮮語が分からなかったので小学校1年に入りなおした。小学校4年まで延吉で過ごし、その後、両親がいるソウルに移った。中国では「朝鮮族」という意識はほとんどなく、中国人という意識が強く、民族差別は感じたことがないという。ソウルに行って初めて朝鮮族を意識するようになった。

「両親はわたし（C・Zさん）が小学校3年の時からソウルで働くようになり、やっと親に会えるという嬉しさでいっぱいでした。（中略）上海にいたころは朝鮮族という意識はありませんでした。（ソウルでは）朝鮮族だということはばらさずに、ぼくは中国人というだけで生活しました。朝鮮族ということがばれたら差別される恐れがあるから、朝鮮族だと知っているのは先生だけ。」

「（ソウルでの生活は）簡単に言うと楽しかったですね。中国よりは宿題も少ないし、学校もすぐ終わるし。そっから遊びたくなりました。（中略）朝鮮語も最初は発音がヘンとか言われましたが、みんなと過ごす中ですぐに治りました。今も自分が朝鮮族

だと知っている人は絶対にいません。韓国では（私のことを）中国人だと思っています。」

「苦しかったことはありません。直接差別されることもありませんでしたから。たまにネットで中国人や朝鮮族に関する悪い書き込みがあり、その時はちょっと苦しかったかな。（中略）朝鮮族に対する書き込みはひどかったです（韓国のインターネット）。ばれたら友だちは俺のことどう思うかな？だから秘密は死守しました。今でも言いたくない。」

韓国では差別から身を守るために自分が朝鮮族であることを隠し続けたC・Zさんは日本留学を機に朝鮮族であることを公言するようになる。

「朝鮮族、あ～臓器売買人みたいな感じで韓国では朝鮮族は『悪い人』というイメージでした。日本では誰も朝鮮族のことを知らないし。KISのみんなはいろんな人がいるから、自分が朝鮮族だと話しても問題ないと思いました。」

「日本に来るときにはいっぱい期待しました。日本人は優しいし。期待どおりでした。でも、日本に来るまではこんなに同じ民族に会えるなんて思ってもみませんでした。韓国人とか、在日とか。在日って？朝鮮族？同じ民族っていう感覚はあるが国は違う。」

韓国にいる自分の友だち、コリア国際学園の韓国人。同じ韓国人、同じ友だちでもC・Zさんからは複雑な感情が読み取れる。

「韓国人？もちろん同じ民族です。でも、韓国の友だちは自分のことを韓国人だとは思っていません。KISの韓国人には自分が朝鮮族であることを話せませぬ。環境ですかね。韓国ではいつも朝鮮族に対する悪い情報が流れています。KISでは自分が朝鮮族だと言っても誰もヘンに思いませんから。」

中国、韓国、日本と住むところが変わっても自分自身は変わらないが、民族ということについての考え方が変わったという。

「中国では自分は中国人で朝鮮族、韓国でも同じです。日本に来て自分と同じなんです。今自分の周りには『同じ民族』って感じがするんです。」

今も昔も朝鮮族としての誇りを持っており、将来は4か国語を話せることを活かした仕事に就きたいと考えている。

「自分が朝鮮族ということについてなんですけど、自分は朝鮮族ということ誇りだと思います。それは今も昔も変わりがありません。」

「今も昔も」という表現には、韓国で差別を避けるために朝鮮族だということを隠さざるを得なかったことへの複雑な心境と、「誇りがなくて隠したのではない」という意思が感じ取れた。

H・Mさんに対するインタビューは、2021年2月19日にZOOMによるオンラインで実施した。インタビュー言語は日本語である。

H・Mさんの両親は日本との貿易に関する仕事をしており、その関係で2015年1月にコリア国際学園に転入した。教育熱心な両親は常にH・Mさんの教育を最優先し、学校内外で企画する研修やボランティア活動に積極的に参加させた。もともとは日本の大学への進学を希望していたが、高等部2年時のカナダ研修(バンクーバー)を経て、カナダへの進学を希望するようになった。カナダの大学への入学が決まっていたが、2020年の新型コロナウイルスの感染拡大で取りやめ、2020年9月に京都の大学に入学した。

H・Mさんのご両親は延吉出身の朝鮮族で、H・Mさん本人は上海で生まれた。両親の仕事が忙しく、1歳から4歳までは延吉で過ごしたが、その後は上海で育った。延吉では朝鮮族の幼稚園に通っていて、上海からは英語系の幼稚園に通うようになった。4歳までは朝鮮語しか話せなかったが、上海の幼稚園で中国語と英語を学んだ。朝鮮語はすぐに忘れてしまい、その後は家族とも中国語で話すようになった。父親と母親は朝鮮語で話していた。

H・MさんもC・Zさんと同じく、中国では朝鮮族ということ意識することは、ほとんどなかったという。

「上海の幼稚園には中国人だけが通っていました。

英語幼稚園と言ってもメインは中国語で、たまに英語の先生が来て英語を教えてくださいました。その時は民族なんて意識していなかったんですが。たぶん、私が朝鮮族だと知ったのは小学校2年のことです。その時まではずっと漢族やって思っていました。(中略) 小学校がけっこうインターナショナルなところやったんで、帰国子女もいましたし、日本人の子もいました。その時にはじめて、あっ、民族っていうワードがあるんやって知って。でも小学生やったんで国とかそんなのがよくわからなくて、カナダから帰ってきた人はカナダ人って思っていました。漢族でしたが。」

「小学校2年の時に学校でなんか書類があったんです。親に渡す前に自分で書いて、『漢族』って書いたら、『違うよ、朝鮮族だよ』って言われました。」

「(朝鮮族だって知ったときは) あっ、うれしかったです。なんか特別感があって。少数民族って良いイメージも悪いイメージもあると思うんですが、私の周りには『おお、すごいじゃん』みたいな感じで。初めて朝鮮族だって知ったときはうれしかったです。」

少数民族ということで差別などを感じたことは無かったが、上海人と新上海人¹⁹⁾の間には溝があり、差別などもあったという。中国では見た目、言葉も同じなので、学校内に少数民族の生徒がいてもほとんど分からず、朝鮮族という理由での差別を受けたことがなかった。そのため、朝鮮族であることを意識することもなかった。

日本に来てから最初に苦労したのは文化の違いであった。

「最初はやっぱり、あの文化が違ってたんで。そこをどうにか自分の中で消化するのに時間がかかりました。例えば、結構ズバズバ言うじゃないですか。中国人は。でも、日本っていう社会はもうちょっと遠回しに言うというか。最初はそのパターンが分からなくて、思っていることをそのまま言って、みんなにびっくりされました。」

「最初は空気が重かったんですが、だんだん周りもチャイニーズははっきり言う人が多いし、H・Mも

そんな文化で育ってきたんやからって。日本はこういう文化なんだよって教えてくれて、みんなも（私を）理解してくれて。（中略）中3のころから普通に過ごせるようになりました。」

会話の中で自然に「チャイニーズ」という単語が出てきた。

「中国にいたころは中国の歴史しか習わなくて。KISに来るまでは韓国人の友だちもいなかったし。KISに来てから韓国人の友だちもでき、朝鮮族の歴史もめっちゃ昔からの歴史から現代まで習って。アイデンティティについて深く考えるようになりました。」

C・Zさんも、H・Mさんも日本に来てから「朝鮮族である自分」について考えるようになった。それと同時に韓国や日本での差別の危険性から、朝鮮族であるということを隠したり、中国人というワードを使わなくなったりしている。

「最近『中国』っていうワードをあまり使っていないくて、友達と話すときもチャイニーズって言います。そっちのほうがりっくりする気がします。ニュースで中国・中国人って言ったら日本人からしたら悪いイメージがあると思うんですけど、チャイニーズってワードの雰囲気は優しくて。」

「日本に来てから中国では見えないものが多く見えるようになって。日本ではこんなにも中国が嫌がられている、中国っていうワードの後に良い文章が続かなくて、一瞬ですけど中国っていうワードが怖くなりました。」

H・Mさんは、コリア国際学園で日本文化に慣れようとし、自分を理解してもらおうとした。その後、高等部2年時のカナダ研修をきっかけに、さらにグローバルな存在である自分をイメージして「チャイニーズ」というワードを使うようになった。

「たぶんカナダ研修が影響を与えたような気がします。カナダって多民族じゃないですか。英語もバンバン使って。けっこう楽だなって思ったんです。みんなは帰りたいて言っていましたけど、私は一生住んでも良いと思いました。英語はグローバルだし、ど

こでも使われているんで。英語でチャイニーズって言ったら、グローバルな感じもして受け入れやすいかと思って。」

高等部2年時のカナダ研修でバンクーバーを訪問した。アジア系の移民が多いバンクーバーでは、必ずしも自分が「中国人」である必要は無かった。韓国や日本で差別の対象として語られた「中国人」、「朝鮮族」という言葉は、コリア国際学園では自分自身について考え、語るための言葉になった。民族を意識することが無かったカナダで使われる「チャイニーズ」という言葉は、日本や韓国で差別を連想させる「中国人」とは違う響きであった。「中国人」を英語に置き換えただけの「チャイニーズ」という言葉は、中国人・朝鮮族として、よりグローバルに生きたいと願うH・Mさんにとって、一番しっくりくる言葉なのであろう。

日本で大学を卒業した後は両親の老後の移民先も含めて、カナダへの進学を考えている。

3.3. C・Cさんのケース：「私、中身はアジア人なんです」

C・Cさんは2021年2月19日と4月27日に対面でインタビューを実施した。インタビュー言語は日本語である。

C・Cさんの両親は、父親がナイジェリア人、母親が在日コリアン（韓国籍）である。大阪で生まれてすぐに両親は離婚し、母親と祖母の3人で暮らした。2歳のころに母親と一緒にマレーシアに移住し、11歳の時に日本に戻った。帰国後は中華学校に通ったが、2016年度にコリア国際学園の中等部1年に入学した。中等部1年時、筆者が担当する在日コリアン史の授業で「私は〇〇人」というテーマでグループディスカッションをしたことがあるが、C・Cさんは自身のことを「国際人」と表現した。現在は高等部3年に在籍中である。

「アフリカの血が入っているんでお母さんとおばあちゃんが心配して。日本ではみんなと違うんで、いじめられるんじゃないかって。それで一目置かれる

存在にならないといけないっていうこともあって、語学(の勉強)をすることにしました。(中略)いろんな学校に見学に行きました。ハワイにも行っただし。それで最終的にマレーシアになったんです。」

将来、本人が周りからの差別に苦しむことがないよう、母親や祖母から「あなたは特別な存在」と言い聞かされて育った。マレーシアでは英語系の学校に通い、日本人会の活動にも参加した。

「マレーシアはみんな違うから、違うところを探さない。アフリカもいたし、中東もいたし。クラスメイトが10人いたとすると、同じ国の人は1人か2人。あとはみんなばらばらです。会話も授業もすべて英語です。中国語も習いました。」

『「自分がみんなと違う』と感じるのは日本に帰って来た時です。日本に帰ってくると、自分は違うんだって思うんです。」

「(母親や祖母から)よく言われました。あなたは違うっていうのを自覚したうえで行動しないと、変な事したら偏見につながるよって。(中略)小学校6年の時に塾からの帰りに嫌なこと(差別的な発言)を言われたことがあるんです。内容は忘れちゃったんですけど。家に帰って親に話したらね。(相手も)怒ってくれたり、慰めてくれたりしてくれると思ったんですよ。そしたら『あなたは違うんだから。それは分かっておかないと』って言われたんです。」

インタビューで、筆者の「今も国際人だと思うか」という質問に対して、「今は少し小さくなってアジア人です」と答えた。

「自分にはナイジェリアの血が入っているということはずっと考えてきたんですよ。だからその時(中1の時)は地球人とか国際人とか大きな枠組みで考えたんですけど、今は、確かにアジア以外の血は入ってるけど、育ってきた道にそういうのは一切なかったっていうか。食文化も考え方もアジア的な部分しかない。」

「(KISに来て)良かった面は、まず自分が何人であるというか、アイデンティティとかを考える時間がたくさんあって。はっきりしてきたかな。とても

感謝しています。あと、韓国語ができる、4言語目をマスターしたことです。」

「(自分について考える時間は)正泰先生(筆者)の在日史の授業とか 코리아史の授業、(英語の授業での)ディベートとか、文化祭のときの展示とか。あと、去年の多文化共生論の時間、ホームルームとかも。」

アフリカの血が入っているということで、幼い頃から「周りとは違う」、「特別な存在」であることを常に意識してきたC・Cさんは自分のことを日本人とも韓国人とも思ったことがない。母親や祖母からの影響で「日本人にも韓国人にもなれない」というマイナスのイメージではなく、自分を特別な存在としてのイメージで「国際人」と表現したのかも知れない。

코리아国際学園での多様な生徒たちとの出会いと教育の中で自分自身について深く見つめる過程で、外見によらない自身の本質的な姿に目を向けるようになった。父親ともほとんど接点がなく、ナイジェリアに行ったことがないC・Cさんにナイジェリアに行ってみたくないと聞いてみた。

「いつかは行かないといけないと思っています。でも、そこ(ナイジェリア)にも属せないと思います。少しだけさみしいと感じると思います。」

C・Cさんの言う「アジア人」という言葉には、日本で生まれ育った、코리아にルーツがある、韓国籍という意味が込められている。あるいは、幼いころに過ごしたマレーシアや、中国語を話せて、中国に行ったことがあることも含まれているかも知れない。しかし、多様な文化的背景を持つ友人たちと自由にアイデンティティについて考えることができる코리아国際学園と、「日本人」という圧倒的なマジョリティが存在する日本社会とのギャップを感じて、「複合的なアイデンティティを持つ自分」と「どこにも属せない自分」の間で揺れ動く姿が垣間見られた。

おわりに

本稿では、日本社会における多文化共生教育のモデルケースとして、コリア国際学園の教育活動を当事者の立場から省察した。コリア国際学園に関する既存研究では、日本社会にある外国人学校、または、オールドカマーの民族教育との違いがクローズアップされてきたが、本稿は「多様な言語・文化が混ざりあう多文化社会」としてコリア国際学園を捉えた。日本語を母語とする生徒が7割、コリアにルーツがある生徒（在日コリアンと韓国人留学生）が6割という状況は、偏りがあるとも言えるが、それは、実生活の中で各々がマジョリティにも、マイノリティにもなれる環境である。そのような環境の中で、それぞれの文化を尊重しつつ、相乗効果が生まれる状況を作り出してきたコリア国際学園のチャレンジは貴重な経験であると言える。

本稿では、お互いの言語を学びあい、異なる生活習慣への接触機会を増やすことが言語的・文化的葛藤の解消に効果的であるということを明らかにした。また、生徒たちのインタビューを通じて、コリア国際学園という環境（多様な言語・文化が混ざりあう多文化社会）が自らのアイデンティティについて自由に考えられる状況を作り出し、それが他者理解や自己肯定感の向上につながることも明らかにした。一方で、コリア国際学園と日本、あるいは韓国とのギャップが依然として存在し、その中で揺れ動く生徒たちの姿も見られた。

コリア国際学園は、越境人について以下のように規定している。

「コリア国際学園（KIS）は、在日コリアンをはじめとする多様な文化的背景を持つ生徒たちが、自らのアイデンティティについて自由に考え学ぶことができ、かつ確かな学力と豊かな個性を持った創造的人間として複数の国家・境界をまたぎ活躍できる、いわば『越境人』の育成を目指します。」（2020年度パンフレットより抜粋）

東アジアは、20世紀の冷戦構造が崩壊した後も、人々の平和を脅かす不安定要素を多く抱えている。朝鮮半島は未だ分断国家として存在し続けており、中国と台湾、香港の問題も解決の糸口が見えない。それらすべての国や地域と日本は歴史的な問題を抱えている。また、環境問題や原発問題なども、東アジアが共通で抱える問題である。これらの諸問題はこれまでのような国家同士の利害だけで解決できる問題ではなく、人類共通の課題として、国境を越えて取り組む必要がある。コリア国際学園が目指す「越境人の育成」のための教育は、日本や韓国における多文化共生社会の実現やグローバル化のモデルケースとしての意義だけでなく、これらの問題に新しい視点から取り組む志と能力を持った人材を輩出していくことが期待される。

注

- 1) 本稿では、ミックスルーツを持つ人たちも含めて「多民族」と言う言葉を使う。
- 2) 日本による朝鮮半島の植民地支配以降に日本に渡り、1945年以降も日本に住む朝鮮人とその子孫については様々な呼称がある。在日朝鮮人、在日韓国人という呼称に加えて近年は在日コリアンという呼称も一般的になってきた。本稿では特に区別する必要がない限り在日コリアンとした。
- 3) 在日朝鮮人が設立した学校で朝鮮語や朝鮮の歴史、文化を学べる学校。日本全国に幼稚園から初級学校、中級学校、高級学校、大学が存在する。日本では各種学校と位置付けられている。
- 4) 高等学校の就学支援金支給に関して多くの外国人学校も支給の対象としているが、朝鮮学校を対象から除外した問題。当初、支給対象に「文部科学大臣が定めるところにより、高等学校の課程に類する課程を置くものと認められるものとして、文部科学大臣が指定したもの」という条項があり、朝鮮学校への支給が検討されたが、その後、条項を削除した。
- 5) 学校教育法第一条で規定された、幼稚園、小学校、中学校、義務教育学校、高等学校、中等教育学校、特別支援学校、大学（短期大学および大学

- 院を含む) および高等専門学校。
- 6) 「複数の国家・境界をまたぎ活躍できる越境人の育成」はコリア国際学園の建学の精神である。「越境人」とは国家や民族、思想、学問、さらには、過去・現在・未来と言う時間軸や、知識の境界もまたぎ、つないでいくというイメージで「境界をまたぐ越境人」と表現することが多い。
 - 7) コリア国際学園では韓国語・朝鮮語のことをコリア語と呼ぶ。本稿でも特に分ける必要がない限りコリア語と表記した。
 - 8) 森田芳夫 (1996) 『数字が語る在日韓国・朝鮮人の歴史』 明石書店 71頁
 - 9) 1945年、日本の敗戦によって植民地支配から解放された在日朝鮮人が、日本各地に作った民族教育施設で全国に600校に上った。民家や教会やお寺、倉庫などに教室を作り、朝鮮語が話せない在日朝鮮人2世に対する朝鮮語教育を行った。
 - 10) サンフランシスコ講和条約 (1952年) によって日本国籍を喪失した在日朝鮮人、および、その子孫のうち、大韓民国の国籍、日本国籍など、いずれの国籍も取得していない場合に「朝鮮籍」となる。ここでいう「朝鮮」は国籍を表しているのではなく地域を表す。大韓民国の国籍や日本国籍を取得していない、いわゆる朝鮮籍の在日朝鮮人は、朝鮮民主主義人民共和国を支持している人たちの他、「地域としての朝鮮」が分断前の地域を指していることから、分断を認めないという意思表示をする人たちでもある。
 - 11) 外国語で、外国語以外の授業を学ぶ外国語学習方法のことで、数学、社会など英語以外の科目を英語で学ぶ英語学習法である。コリア国際学園のコリア語、英語の授業は社会問題を題材にすることが多く、社会の授業を英語やコリア語で行うイメージで学習だと考えることができる。
 - 12) 当時の厳敏俊校長からの聞き取り。(2011年2月)
 - 13) 両親が在日コリアンで、韓国とアメリカの国籍を持ち、アメリカで生まれ育った生徒2人は「在日」に含めた。
 - 14) コリア国際学園の専任・常勤教員は全員が、2言語以上が使用可能で、コリア語が可能な教員は11人中、9人である。留学1年目の韓国人留学生
- がいる授業はできるだけコリア語が可能な専任・常勤教員を配置し、両言語で対応できるようにした。
- 15) 「東アジア文化交流と平和のためのオリニ希望学校」は、韓国、日本、中国、ロシアに住む子どもたちの教育交流キャンプで夏休みに1週間程度の日程で実施される。4か国の市民団体が共同で運営する教育プログラムで、日本での運営は筆者が代表を務める特定非営利活動法人 Glocal NET が担当している。2005年から始まり、現在は韓国、日本、中国、ロシアを巡回しながら開催している。
 - 16) コリア国際学園の中国人留学生が自主的に作った研究会。中国の文化を学校内外に知ってもらうために活動した。文化祭や地域のお祭りで中国のお菓子や遊びを披露することもあった。
 - 17) 国際バカロレア機構 (本部ジュネーブ) が提供する国際的な教育プログラム。「国際バカロレア (IB:International Baccalaureate) は、1968年、チャレンジに満ちた総合的な教育プログラムとして、世界の複雑さを理解して、そのことに対処できる生徒を育成し、生徒に対し、未来へ責任ある行動をとるための態度とスキルを身に付けさせるとともに、国際的に通用する大学入学資格 (国際バカロレア資格) を与え、大学進学へのルートを確保することを目的として設置されました。」(文部科学省 IB 教育推進コンソーシアムのホームページより)
 - 18) TOK (Theory of Knowledge) は国際バカロレア DP 過程の科目で、知識自体を学びの対象としている科目。DP 過程ではコア科目として位置づけられており、すべての科目において TOK 的な思考方法が求められる。
 - 19) 他地方の出身者で上海に居住する人をいう。2001年に上海市党書記であった黄菊が、優秀な人材を上海に集めるために使った概念とされるが、筆者のインタビューでは「よそ者」と言う意味合いで使われていた。厳密な定義はなく、上海の戸籍を取得した人、または、単に地方から上海に出てきている人たちのことをいう。他地方から上海に移住した人の子が上海の戸籍を取得した場合や、地方から上海の大学に出てきた人、上海で働いている地方出身者が含まれる。

参考文献

- 趙世珍 2019 「境界を開く言葉を求めて—コリア国際学園の在學生・卒業生の事例から」
- 姜在彦, 姜徳相, 金敬得, 朴一, 姜誠, 鄭大聲, 孫成吉 2013 『歴史教科書 在日コリアンの歴史[第2版]』明石書店
- 金南咲季 2016 「地域社会における外国人学校と日本の公立学校の相互変容過程—コンタクト・ゾーンにおける教育実践に着目して—」
- 金南咲季 2018 「外国人学校に通う日本人生徒の語る学校選択—新興コリア系外国人学校の事例から—」
- 森田芳夫 1996 『数字が語る在日韓国・朝鮮人の歴史』明石書店
- 額賀美紗子・芝野淳一・三浦綾希子 2019 『移民から教育を考える 子どもたちをとりまくグローバル時代の課題』ナカニシヤ出版
- 佐藤郡衛 2019 『多文化社会に生きる子どもの教育 外国人の子ども, 海外で学ぶ子どもの現状と課題』明石書店
- 脇坂紀行 2015 『混迷する東アジア時代の越境人教育 コリア国際学園の軌跡』かもがわ出版

Multicultural Society Created by Students Who Crossed National Borders: The Case Study on Korea International School

KIM Jeongtaeⁱ

Abstract : Korea International School (KIS), located in Ibaraki City in Osaka Prefecture, was established in 2008 in response to high demand from Zainichi Korean society in Japan for international education. The students of KIS come from various backgrounds – many are Zainichi Koreans, Japanese, Korean or Chinese citizens. Some of them are students with multiple nationalities. KIS started recruiting and teaching overseas students in 2011. Soon it became obvious that a multinational environment creates a certain tension between foreign students and students whose native language is Japanese. Discussions in Japanese academic researches on this topic focus on the issues of foreign students' school absence, foreign student support and identity crisis. However, the case study of KIS school shows that international students' experiences play a vital role in the process of solving cultural conflict problems as well as making the school more multiculturally diverse. I reflect on the process of reform of KIS, which is growing as multicultural, multilinguistic, multiethnic and multinational school. I also explore the educational approach to a multicultural society depending on the data which have been obtained through interviews with four border-crossing students.

Keywords : Multiculturalism, Multicultural Exchange, Foreigners school, Overseas students, Identity, Linguistic education, school transformation process, cross-cultural conflict.

i Principal, Korea International School